
転生! 伴侶?(仮)

negai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生！ 伴侶？（仮）

【Nコード】

N3294X

【作者名】

negai

【あらすじ】

それは、真っ白な空間に漂っていることに気がついた。

初投稿なので駄文ですが、楽しんで読んでいただければ幸いです。

第1話（前書き）

私の感性に従い書いていますが、見苦しい点が多々あると思います
が温かい目で見守っていただけると嬉しです。

話の内容は大体こんなのにしようと思いつかぶのですが、小説の顔
でもある「タイトル」のいいやつが浮かばなかったので、とりあえ
ずこれにしてみました。が別のいいタイトルが浮かんだらそれに変え
ますのでご了承ください。

第1話

「 じじは、 」

自分を囲むのは、何もない真っ白な空間。気がついてから、ずっと
うつうつうつうつと、その空間を眺めていて、どれくらいの時間
がたったのか分からなくなったころ、そう呟いてみた。

「お前、変わっているな」

後ろからいきなり声が聞こえてきた。

「そうかな？」驚きもせず振り向かず、言葉を返した。

「変わっている。ほとんどのものは、すぐに声を上げるか、発狂し
ている」

よく分からなかったしどうでもよかった。それが分かったのだろう、
呆れたようなため息が聞こえた。

「お前が気がついて、声を発するまで1月の時間が流れている」

「そうなの」「どうでもよかった。また呆れたようなため息が聞こえ
た。」

「事故であれ故意であれ、ここに入ったものに対して決まりがある。」

正直にそう言うと、笑われた。癪に障る。

「すまんすまん。やっぱりお前は変わっている。そう言ったことは、普通分らないものなんだがな」

「

」

肯定されて、なんて答えたらいいのか分からないから、沈黙を答えにしてみた。

「話は変わるが、お前は転生したいか？」

「自我がある限り、生を放棄するつもりは無いよ。転生できるっていうのなら転生するけど、私 魂だけの存在なの？」

「気づいていなかったのか？」

「うすうすは、そうじゃないかなと思ってた。単なる疑問だけど、転生しないとこと同化するの？」

「そうなるな」

「ためらいもなく、言い切るのね。事実でも肯定されたら、その瞬間に発狂するものもいたでしょうに」

そうなったもののことを思い、呆れたように呟いた。

「いたな。だが、我には関係ない。発狂したら消滅させるだけだ。転生させるよりも面倒がない」

ただ、淡々と告げる。事実なのだろう。自分もその1人になったのかもしれないが、起こらなかつた可能性を考慮するよりも、これからのことを考えることの方が大事だし建設的だ。だから。

「私は転生できるの？」

「できる。ふむ」

それは、何か考え込むように呟くと目の前に少年がいた。白い髪赤い瞳の美少年。10人いれば10人、100人いれば100人、そばに少年がいれば振り返らずにはいれないほどの圧倒的な美貌。

「なぜ形をとつたのですか？ 私は、あなたにとってとるに足りない存在だと思っていたのですが」

「確かに、ここに迷い込んだものたちの前に姿を形とつたことはないからな。その必要もないからな。声をかけて、魂を転生の輪に乗せるだけだ。それで終わりだ。単純な作業だ。」

だが、お前とはそれだけで済ませてしまつのは 惜し様な気がしてな」

「そうですか」

「それに 気に入つたからな。だから、3個ほど能力をあげよう。ただし、力が大きいものは制限がつく。」

世界はそれぞれ柔軟にできているが、世界の補正力が上回る力が加わるとその世界が壊れてしまうからな」

「そうですか。貰った能力の設定を少ししてもいいですか？」

「構わないが、そうなるともらえる能力が1つ減るかもしれないが、いいのか？」

「はい、構いません。」

絶対に欲しい能力は2つ。

1つ目は、文殊が欲しいです。

2つ目は、知識や情報を本などにして自由に閲覧できる能力」

そう言っ言葉を切り、1つ深呼吸する。

「文殊は何もしないと1日10個の文殊が自動生産されて、体の中にストックされストックの数が意識を向けるとわかり『瞑想』をすると約1時間で100個の文殊ができ、それから文殊は何個でも並列使用できる制御能力。文殊の文字や力は私以外は感知できないようにお願いします。」

2つ目の能力は、私の知りたい知識や情報をピンポイントで検索手元に本などが取り出せるようにお願いします」

彼は、少し考えるそぶりをすると苦笑するようにこたえた。

「分かった。ただし、こちらも条件を付ける。文殊は、新しい世界で産まれてからすぐに毎日10個の文殊が生成されるが、1度でも『瞑想』で文殊を生成するとその瞬間から、1日10個の自動生産がストップする。」

2つ目の能力は、お前しか閲覧できない」

私は付け加えられた条件に了承した。

「ふむ」

そう言って彼は、私に口づけた。

「一言断ってください。思わずあなたの舌を噛み切ってしまうつもりでした」

「の割には、受け入れていたな」

くすくすと笑う。

「あなたは理由もなくそんなことをする方ではないですからね」

「言ってくれる」

どこか面白がっている口調だ。

「あなたが感情的に行動することが、どうしても想像できなくてね」

私が少し苦笑するように言葉を返した。

「なるほど。では、輪廻の輪にのせるぞ」

私は、彼の手によって輪廻の輪のせられる前にくすりと笑って彼の唇に軽く触れて「ありがとう」と礼を言って輪廻の輪に入っていた。

第2話（前書き）

少年の容姿を考えたとき色をなくそうと思い、髪は白か銀で目の色は白か青がいいかなと思っただけど、髪を白、目の色を赤にしたら、アルビノ 先天性色素欠乏症と呼ばれる容姿になった。このことは、後で知ったから「あらく」と思った。

第2話

少年は無表情になり驚いた表情をすると、顔を歪め笑った。

「 やってくれる 」

少年は初めてあれを見たときのことを思い出し、不思議な気持ちになる。

この世界にはよく異物が侵入する。侵入した異物はすぐにこの世界の栄養として同化吸収される。稀に同化吸収されなくて目を覚ますものもいる。だが、何もない真っ白な世界を見るとほとんどのものは発狂してしまう。発狂したものは煩わしいのですぐに消滅させる。発狂しなかったものは少し話して輪廻の輪に乗せる。

だがあれは変わっていた。

最初はいつもと同じ異物だと思った。

だが、この異物はなかなか世界の栄養として同化吸収されず年月にして1000年この世界を漂っていた。

だから興味を持った。いつ気がつくのか楽しみになった。

気がついたら気がついたで、1月の間も発狂せずに真っ白な空間を

眺めてたのも面白かった。

いつもなら一言二言言葉を交わしたら転生の輪に乗せるか消滅させる。

あれとは会話をしたくなつた。

話していて楽しかった。いつまでも話をしていたいと思ってしまう。

ドキドキしているのが分かる。

そばにいるだけで嬉しい。

こんな感情は初めてで、恋をしているみたいだ。

だからだろうか？

いつもなら事務的に異物を輪廻の輪に乗せて終わりなのに余計な事をしてしまった。

我はあれに何かしてやりたくなつた。

だから能力をやると言ってしまった。

後悔はしていないが余計な事をしたとは思っている。

余計な事 この世界に入り込んだ異物は栄養として同化吸収されず意識を保てると魂の格が上がるので、新しい世界でははつきり言つてチートに分類される。

ほんの僅か居ただけでも周りのものとレベルが一桁も二桁も違ってしまうので、一生を楽に過ごせることも義務に縛られて身動きがとれなくなるものもある。

だが、あれは違う。あれは1000年以上もこの世界に栄養として同化吸収されずに存在でき、独りで1月もの間白い空間を眺めていながら狂気に陥らずに正気を保っていられた

我があげた文殊

あれは文殊であって文殊ではない。

普通文殊は、靈力を結晶化させたもの。

だが、あの文殊は、靈力だけではなく色々な力を混ぜ合わせて結晶化させたものだから、威力も桁違いにある。それに、文殊に入れる文字は漢字だけではなくすべての文字に対応できるようにしておいた。それに文殊の作る数を制限したけど 実際は逆で文殊は欲しいとき望んだ数だけ直ぐに作り出すことができる。

そんな風は無茶苦茶したので、力に対して柔軟性の低い世界だと簡単に世界が崩壊してしまうので、相当柔軟性の高い世界じゃないとあれは、受け入れられない。

そして、柔軟性の高い世界は総じてファンタジー系に絞られてしま

う。
それでも対策として、あれの魂に力や文殊を使うとき文殊を使って世界が壊れないように、世界の柔軟性の強化保護を義務付けているから大丈夫だと思う。

それに

世界が壊れてもあれは無事だろう

。

あれの魂は 我に近くなっている。

そう思うと痛ましい思いと愛しい思いが同時に浮かび上がってくる。

あれは 怒るだろうか ? 嘆くだろうか ?

呆れるだろうか ? それとも違う反応を返すだろうか ?

あれの反応を思うと楽しくなる。

あれは、自分の知らなかった感情を引っ張り出す。

だから、また会いたいな 。

少年は切なく思った。

第3話（前書き）

続きというより、主人公の転生先の世界の説明の様なものです。

短いです。

第3話

黒い髪黒い目、象牙色の肌、顔の造作は神の芸術と言っていいほど整っている。

5歳には届かない愛らしい幼女。それが私である。私は転生者である。3歳の誕生日を迎えて少したったころ前世の記憶が蘇った。

吃驚したけど取り乱さなかった。

我ながら淡泊？だな〜と思ってしまいがどうでもいい。

それより気になることがある。彼から貰った能力の1とつ文殊、文殊は靈力を結晶化させたもののはずだがこの文殊は靈力で出来ていない。それに文殊は漢字を使用するがこの文殊はどんなの字にも受け入れ対応してしまう。

それに使用条件が追加されているのには驚いた。

このハイスペックな性能に気づいた時の私の心境をどう表現すればいいのか分からず途方にくれたのは記憶に新しい。今でもそのことを思い出すと一瞬遠い目をしてしまう。

この世界は地球の日本人の前世の記憶を持つ私にとってファンタジ

ーな世界である。

まず、魔法がある。精霊がいる。神族もいる。人間以外の異種族の知的生命が多くいる。魔物もいるらしいが、ゲームのように倒したら直接お金が手に入るわけではないらしい。

この世界はいくつかのギルドがあり、そのギルドを通してほとんどのものは生活している。

この世界の生き物全てが魔法を発現する『力』を持っている。

魔法 と私が便宜上呼んでいるものに発現する『力』にもいくつか種類がある。

今分かっているのは、魔力・霊力・神力・気力に分類される。

魔法の種類も幾つかある。

他にも色々系統があるらしいが、私が知っているのは3つ。

魔法陣・カード等に文字や図式に『力』を宿してさせ現象を具現化させるため、時限式一（罫）・携帯魔法と呼ばれている。

精霊術・精霊に『力』を報酬として渡して精霊の力を借り現象を具現化させるため、スピードと威力がダントツに飛びぬけていて、精霊の力・数で威力が決まると言われているが実際は不明である。

構成術・自分の中の『力』を使って現象を具現化させる。自分の『

力』のみで威力・術の構成をその場で組み上げていかななくてはいけないから制御が1番難しい。

そしてこの世界・ユーティリアは6つの大陸と大小の幾つもの島のある世界。

この世界・ユーティリアは戦乱の世界でもある。

世界のどこかで国・種族間で争い事がある。

それだけでも厄介なのに魔物が頻繁に村や町・生き物を襲う。

だから、生き物の集まる集落一（村や町）は周りを囲むような高い外壁を築き、外壁に外敵が侵入できないように強力な結界を張って集落を守っている。

弱者は即、死に繋がる弱肉強食の厳しい世界である。

今分かっているのは、だいたいこれくらいである。

とにかく、新しい人生の幕開けである。

第3話（後書き）

転生先の大まかな情報を主人公が確認している感じにしてみました。

主人公の名前次出ます。

第4話

「リオ！」

漆黒の腰まで届く髪を後ろに簡単に括り、紫紺の瞳を愛しげに娘を見つめながら名を呼ぶ。

「はい！ 母様！」

私は母親に名を呼ばれ、返事を返して嬉しそうに抱きついた。

ぎゅっぎゅっぎゅっつと、母も私を抱きしめ返してくれた。

「母様！ 母様！ 大好き！ 大好き！」

「母様もリオが大好きだよ！」

そう言っつて、私の頭を撫でてくれる。

私は母様に撫でられて、気持ち良さそうに目を細める。

「それにしても、リオは甘えん坊ねえ」

母は私の頭を愛しげに撫でながら嬉しそうに言う。

「だって、母様いい匂いがするもの」

「ありがとう。母様もリオをギュっするの大好きよ。愛しいリオがわいいリオ」

私の母はいつも私に溢れんばかりの愛情を示す。

私はそれが嬉しい。

だからいっぱいいっぱい甘える。

前世ではどういった人生を歩んでどう終焉したのかは覚えていない。

だが、大まかなことだけは覚えている。

家族や人の愛情が薄く、裏切られて人生が終わった感がある。

ほとんどのものは前世の記憶などは浄化されて覚えていないのに、私の場合は不完全な浄化なので、今世と前世の性格が上手く混ざり合っていて混乱はない。

だが母様はわずかながらの違和感を感じるのだろう。

私が前世の記憶を取り戻して暫く経った頃　スキンシップが激しくなった。

「リオ。裏の畑からリグの花を10本ほど採ってきてくれる？」

「はい。母様！」

リグの花は薬の原料。根・茎・葉・花びら等全部余すところなく使えるおいしい花である。

また、鮮度によって効力と用途が変わってしまう扱いづらい花でもある。

私の母様はこの一般的に扱いづらい花を好んでよく使う。「なれたらリグの花ほど便利な花はない」とは母の言葉だ。実際にそうなのだろう。リグの花は季節に関係なく、砂漠のような昼の乾燥と灼熱と夜の極寒の温度差の激しい場所だろうと年中氷と雪で閉ざされた極寒の地であろうともその驚異的な生命力で繁殖している。

リグの花は、花の生命力が薬としての効果として表れているのだとというのが一般的な意見である。

実際に過酷な環境で育ったリグの花ほど効力が強い。

そんな訳でうちの畑の一角には薬草畑があり、薬草畑の3分の1はリグの花である。

沢山ある花の中から適当に10本根から丁寧に掘り起こし、軽く土を払い母様のもとに持っていく。

「はい。母様！ リグの花持ってきたよ。これでいい？」

「ありがとう、リオ。助かったわ、手が離せなかったから」

ゴリゴリと薬研で薬草を磨り潰している音がする。

そばに母の手伝いをしている人形が1体、パタパタと忙しく働いている。

「母様、何の薬を作っているの？」

「回復薬よ」

ゴリゴリと薬研を動かしながら、リグの花びらを加える。

「飲み薬？ 塗り薬？」

回復薬にも2種類あり、用途によって性能・効力が違う。

「これは、塗り薬よ。ストックが1つしか残っていなかったから、作り置きと他のも沢山作って街に売りに行こうと思っているの」

「母様、私手伝う！」

手を挙げて元気よく告げる。

それと同時に文殊を使って、薬の作り方を早く憶えるためと手伝いの効率をあげる。

「リグの花を仕分けるから、棚に残っている薬の材料を取ってきて机の上には材料はだいたい揃っている。

それでも足りないものや使い切ってしまった物があるので、新たに作り置きの材料を持ってきてもらおう。

彼女は薬研で磨り潰した材料を持ってきてもらった入れ物に全部移し替える。乳鉢に幾つかの別の原料を匙を使って量を測って入れていく。それをゴリゴリと『力』を加えて薬を生成していく。

同じ材料・分量でも加える『力』の種類によって効果・性能が全然違う物になってしまう。

例えば、『魔力』を加えたら毒に変化するものでも『神力』なら回復といった風に違う物になってしまう。

だからと言って『魔力』なら毒、『神力』なら回復と決まっている訳ではない。材料によっては『魔力』なら回復、『神力』なら毒になる物もあり、加える『力』の種類によって効果・性能が決まっている訳ではない。

こういった『力』を加えて薬や道具等を作ることを『錬金術』という。

彼女は薬品関係の『錬金術』のアイテムをよく作っている。

それらを売って生計を立てている。

簡単に出来る薬品の種類を出来るだけ大量に作り、瓶や容器に詰めしていく。

幾つもの種類の封をした薬品が、机の上に所せましに置かれていき、瓶や容器を種類別に籠の中に分けていく。

「主様、食事の準備が出来ました」

彼女たちが<錬金術>で薬品を作っている間、人形の1体が食事を作ってくれていた。

実に合理的である。

この人形は全部で3体この家にあり、家の家事や彼女たち親子の護衛を担っている。

「ありがとう、キキ」

食事の用意をしてくれた人形に礼をいう。

この人形達は<錬金術>で作られている。

人形は全て女性型で綺麗である。

リオのために男性の人形も置こうかと思っただが、色々考えて止めた。

人形は3体とも同じ顔・同じ髪型で、髪の色も親子と同じ黒髪で違うのは瞳の色だけである。

茶色は、キキ。紫は、トト。藍色は、ノノ。

食事の後、食事の後片付けをキキに、薬の錬金を手伝ってくれた
ノノに錬金の後片付けを頼み、トトに娘の世話をお願いして、明日
街に出かけるための準備をする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3294x/>

転生! 伴侶?(仮)

2011年12月4日01時17分発行